

分校の実践

「子どもたちのためにできること～いろいろな体験を通して～」

1 はじめに

いろいろな病気で入院している子どもたちは、病気によるストレス、長期の入院生活によるストレス、精神疾患や発達障害によるストレスなど、いろいろなストレスを抱えている。そのような子どもたちのストレスをできるだけ和らげるために、日々の授業を通して子どもたちとコミュニケーションをとり、休み時間や自立活動の時間にゲームを楽しんだり、体調が優れないときはベットサイドでゲームを楽しんだりすることを大切にしてきた。このような日々の取り組みとともに、更に「学校が楽しい。」「学校に行くと何か楽しいことがある。」と子どもたちに期待感をもたせるような取り組みが必要ではないかと考えた。

昨年度は、パティシエを招いて仕事の話や「ケーキ作り」の体験、ALTを招いて「お茶会」を行う日本とカナダの文化の体験、ケーナなどの楽器を演奏する人たちを招いて「中南米の音楽」の鑑賞などの取り組みで、子どもたちが楽しみ心に残る思い出となったと思われる。今年度は、昨年度の取り組みの成果を生かしながら、更に子どもたちの心をわくわくさせるような、興味関心をもつことのできる取り組みを行いたいと考えた。

2 昨年度の取り組み

(1) パティシエを招いてのケーキ作り

キャリア教育の一環として将来の職業を考えるために、子どもたちに人気で身近に感じる職種であるパティシエに来てもらって、仕事の内容を話したり身に付けている技術を披露してもらったりした。



仕事の話では、子どもたちの質問に答えながら、パティシエの仕事はどういうものなのか、どうしてこの仕事に就いたのか、この仕事で苦労したことや工夫したことなどを話していただいた。子どもたちは、実際に体験した話で、たいへん説得力があり、集中して一生懸命聞いていた。

ケーキ作りでは、パティシエの方が子どもの手を支えながらスポンジケーキに生クリームをきれいにつけたり、パティシエの方のアドバイスを聞きながらケーキの上にイチゴをのせたり、生クリームのしぼり器をパティシエといっしょにしぼりながら仕上げを行った。子どもたちは、パティシエの手際の良さに感動し、あっという間に美味しそうなケーキができたことに驚いていた。

最後の試食のとき、どの子どももできあがったケーキを、満面の笑顔で、たいへんうれしそうに食べていた。パティシエの方の貴重な話を聞けたこと、ケーキ作りを実際に体験できたこと、できあがったケーキがたいへん美味しかったこと、特に子ども

たちの心に残る取り組みであった。



(2) A L Tを招いてのお茶会

総合的な学習の時間、本校のA L Tと英語の先生を招いて、日本とカナダの文化を体験するために「お茶会」を開いた。掛け軸、茶器、茶菓子などを用意して、できるだけ茶道の雰囲気子どもたちに伝わるように工夫した。前半は、「お茶会」を中心に、お茶の入れ方、作法などの説明を聞き、お茶やお茶菓子を楽しむことによって日本の伝統文化を体験することができた。後半は、カナダ出身のA L Tの話の聞いたり、実物の貨幣や地図、ステッカーなどを見たり触れたりして、和やかな雰囲気の中カナダの文化について知ることができた。



普段は、1対1で授業を行っているので、人数が少なくても集団で授業を受けることは、子どもたちにとって良い刺激になったと思われる。今まで体験したことのない「お茶会」や「カナダの話」を体験することは、子どもたちにとってたいへん興味深く、楽しい取り組みとなった。

(2) 中南米の音楽鑑賞会



ケーナなどの楽器を演奏する人たちを招いて、「中南米の音楽」鑑賞会を小児科病棟のプレイルームで行った。分校に在籍していない子どもや保護者、成人の患者など多くの人たちを交えて、楽しいミニコンサートの雰囲気の中、普段聞くことのないケーナの演奏で「El Cóndor Pasa」などの「中南米の音楽」を鑑賞することができた。また、演奏者の中南米を意識した服装や帽子などが、更にコンサートの雰囲気を盛り上げることができた。演奏の合間に、演奏者の心温まる話を聞いたり、手拍子をしたり、コンサート終了後実際に楽器に触れたり、プレイルームにいる全員が一体となって心休まる一時を過ごすことができた。

3 今年度の取り組み

今年度は、昨年度の「ケーキ作り」「お茶会」「音楽鑑賞会」の成果を生かしながら、更に子どもたちが楽しむことのできる取り組みを考えていった。

(1) 「パン屋さんの仕事って？」

昨年度の「ケーキ作り」に続いて、キャリア教育の一環として将来の職業について考えるために、今年度は身近で子どもに人気のある「パン屋さん」を招くことにした。この取り組みを計画し始めた頃、新聞に「香美市のパン店主、パン職人の全国大会で準優勝！」という記事が載っていた。早速、そのパン店主の方に連絡して、取り組みの趣旨を伝え講師を依頼すると、教員の経験もあると言って快く引き受けてくれた。当日までに何回か打合せを行い、パン職人になるまでの経緯や苦労話、子どもたちの質問への応答、電子レンジを使っての簡単なパン作り、試食等の当日の学習内容について確認した。また、病気で入院していることを考慮して、できるだけ子どもたちが楽しめる取り組みになるようお願いした。



最初に、パン店主の方からパン職人の道に進むきっかけとなった結婚のことや元々料理好きであったこと、朝早く起きて準備しなければならないことなどを話していただいた。子どもたちは、時々メモを取りながら集中して聞いて、たいへん感心している様子であった。

次に、子どもたちが事前学習で考えたことを質問した。真っ先に、ある児童が手を挙げて「残ったパンはどうしますか。」「小麦粉は1日どれくらい使いますか。」と質問し、「残らないように、その日のうちにお客さんに差し上げます。」と聞いて感心し、小麦粉の使用量の多さに驚いていた。また、ある児童は「どんなパンを作っていますか。」と質問し、「120種類のパンを作っています。」と聞いて「すごい。」と驚いていた。また、ある児童は「パン屋さんになるのはたいへんでしたか。」と質問し、「まだまだ修行中です。」と聞いて、「全国大会で準優勝してもまだ頑張っている。パン屋さんの仕事って本当にたいへん。」と言っていた。また、ある生徒からは「パンと奥さん、どちらが大事ですか。」と聞いてみんなの笑いを取り、雰囲気を和やかにしてくれた。

子どもたちは、パン店主の方の話を熱心に聞き、積極的に取り組むことができた。



パン作りで、子どもたちは予め作ってあるパン生地に触れたり、ホットドッグ用のパンの切り込みにケチャップ、タマゴ、ウインナーを入れたりして、実際にパン作りを楽しんだ。また、パン店主の方には、下ごしらえしたパンに卵黄をつけて電子レンジで焼いていただいた。できたてのパンの良い香りが教室いっぱいに広がり、みんなの食欲をそそるように思われた。その後、パン店主の方に、ちくわロール、ウインナーロール、メロンパン、バターロールなど、いろいろなパンをオーブンで次々と焼いていただいた。テーブルの上の焼き上がったパンを見て、子どもたちはみんな幸せな気分になった様子がかがえた。

待ちに待った試食の時、子どもたちは、友だちや保護者、教員とともに楽しそうに話しながら、できたてのパンをたいへん美味しそうに食べていた。残ったパンは、みんなで分け合って、それぞれの病室で食べるようにした。最後に、子どもたちの代表がパン店主の方にお礼の言葉を言い、もう一人の代表がプレゼントを渡した。



この取り組みの後、子どもたちが感想と自分の将来の仕事について書いたもので、以下に示す。

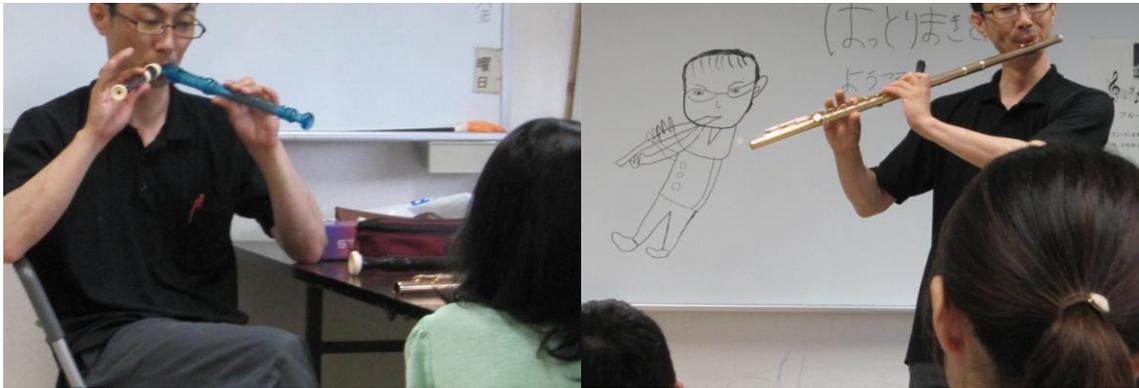
児童A「パンを作り美味しいパンを食べてうれしかったです。」「医者」
 児童B「パンを発酵して焼くのでびっくりしました。」「サンドイッチ屋さん」
 児童C「パンの種類で、パンの生地が違うのに驚いた。」「管理栄養士」
 児童D「ドキドキした。友だちといっしょで楽しかった。ホットドックが美味しかった。」「動物園の仕事」
 生徒E「パンを作っている時の話などを聞いていると、本当にパンが大好きだなと思った。パンを作るのって大変だなと思った。」「洋食や中華料理を作る仕事」

このように、子どもたちはパン作りに興味関心を示し、将来の仕事についてよく考えることができた。それ以上に、全国大会で準優勝した時のエピソードなどを聞いたこと、実際にパン生地に触れパン作りをしたこと、いろいろなパンが焼き上がってい

くところを見たこと、美味しそうなパンをみんなで楽しく食べたことなどが、たいへん貴重な体験となり、子どもたちにとって「学校に行くとは何か楽しいことがある。」という期待感をもてるような楽しい取り組みになったように思われる。

(2) いろいろな楽器での音楽鑑賞会

分校に在籍している子どものある保護者が音楽の教員で、音楽を通して子どもたちを元気づけ自分自身も元気が出るように、音楽の授業や音楽会に協力してくれた。



最初は、ゲストティーチャーとして、保護者や病棟の医師、看護師が参観するなかで、ミニコンサート風に授業を行った。専門はフルートであるが、子どもたちに身近なリコーダーを選び、いろいろな長さのものを準備して、それぞれの特徴を説明しながら音色を聞かせてくれた。1度に2本のリコーダーを吹くなど、子どもたちが驚くような演奏もしてくれた。また、専門のフルートで美しい音色を奏でながら、子どもたちがよく知っている「ジブリの曲」などを聞かせてくれた。子どもたちは、いろいろな種類のリコーダーの紹介、リコーダーやフルートでの演奏、演奏の合間での話などに温かみを感じている様子で、たいへんいやされているように思えた。

約2週間後、その保護者が職場の同僚といっしょに来て、フルート、二胡、アコーディオンを演奏して、ミニコンサートを行ってくれた。



小児病棟のプレイルームで行い、子どもたちだけでなく一般の人たちもたくさん参加してくれた。今回も「もののけ姫」などのよく知られている曲を演奏し、楽器の美しい音色に聴衆はみんなうっとり聞いていた。いろいろな楽器で演奏するだけでなく、楽しいトークで盛り上がり、二胡というめずらしい楽器や横笛に触れてみたり、ピアノを使って手拍子をして身体を動かしたり、聴衆と演奏者が一体になって全員が「ほっと」できるような温く楽しい癒しのコンサートとなった。

約1ヶ月後、二胡を演奏している教員の配慮で、教え子である2人組のプロのギタリストが教室に来てシークレットライブを行うことになった。2人は高知県出身で、テレビドラマや映画の音楽を作詞作曲して演奏し、世界ツアーを行って「日本の古き良き心を感じさせる音だ。」と賞賛されるなど世界で活躍している。入院している子どもたちにとって、この2人のライブを聴く機会はめったになく、たいへん貴重な体験

となった。



彼らのステージでは、その繊細で感傷的な表現力と、とぎすまされたスピード感あふれる演奏、そしてぼくとつとしたトークでみんなに好感を与えることができた。特に、子どもたちは、目の前で演奏されているプロの生ギターの音の迫力に圧倒され、最後までずっと聴き入っていた。ライブが終わって、彼らの最新のCDをもらったり、色紙にサインをしてもらったり、子どもたちにとって心に残る素晴らしい思い出となった。

このように、ある保護者の発案から、ゲストティーチャー、ミニコンサート、プロによるシークレットライブと広がっていったことは、病気で入院している子どもたちのストレスを和らげるだけでなく、その保護者のストレスも和らげることができたと思われる。

(3) その他の取り組み

上記の取り組みの他に、「マジックショー」「バルーンアート」「絵本の読み聞かせ」などを行った。また、ミニコンサートで演奏した3名の方が、年度内にもう1度コンサートを開いて演奏してくれるという知らせがあった。在籍する生徒がいる限り、「学校に行くとか何か楽しいことがある。」という取り組みを続けていきたい。



4 成果と課題

「パン屋さんの仕事って？」の取り組みでの成果は、昨年度の「ケーキ作り」同様に、子どもたちがプロの仕事を実際に目の前で見る事ができたことである。店頭で販売している商品が、プロの鮮やかな手さばきでできあがり、少しであったが「パン作り」に参加できたことは、子どもたちにとって貴重な体験となった。子どもたちの感想からも、「パン作り」に興味関心を示し、将来の仕事を考えるよい機会になったことがうかがわれる。キャリア教育の一環であることも大切であるが、何より子どもたちが楽しみにしていたことが重要である。このように、院内の学校は、入院している子どもたちにとって「唯一社会的学習体験の場」であって、いかなる状況でも権利として保障されなければならない。特に長期入院生活では、学習と体験の担保が重要で、病棟での生活は非日常の異空間であり、院内の学校は日常につながる希望の空間であると思われる。

「音楽鑑賞会」の取り組みでは、分校に在籍している子どもの保護者の協力で、ゲス

トティーチャーとしてのフルートの単独ライブから、その保護者の職場での同僚の協力により二胡、アコーディオンの演奏が加わってのライブ、最後にはプロの生ギターの演奏のライブまで広がっていった。子どもたちにとっては、本当に幸運で最高の体験となったように思われる。また、このような取り組みで、我が子を含め病気で入院している子どもたちのストレスを和らげることができ、そのことによって達成感を得て保護者自身のストレスも和らげることができたと思われる。子どもにとって院内の学校は、入院やつらい治療中の「社会空間」であり、付き添っている保護者にとっても「ホッとできる時間」「ホッとできる空間」でありたい。

課題は、今年と同じような取り組みが毎年実施できるかどうかである。特に「音楽鑑賞会」のように、たまたま保護者の中に音楽の教員がいて、その関わりからプロの生ギターの演奏を聴くことができたが、毎年このようにできるとは限らないと思われる。また、「ケーキ作り」や「パン作り」で誠心誠意取り組んでくれたパティシエやパン店主のような人が毎年引き受けてくれるとは限らない。このような課題を解消するためには、教員間でいろいろなアイデアを出し合って、できるだけ子どもたちの楽しみとなる取り組みを考えていくことや、分校内だけでなく、学校間のネットワークを広げるなど、いろいろなつながりを利用して取り組みを考えていくことが重要であり、今後の課題であると思われる。

5 おわりに

2学期に転入してきた中学部のある生徒はたいへん真面目で、どの教科も一生懸命取り組み、体調が悪くても病室で頑張ることができた。しかし、退院後の保護者手記によると、入院当初は「院内の学校には絶対行きたくない！」と転入することを拒んでいた。このような生徒でも、病気や入院によるストレスは計り知れないようである。

病気や入院によるストレスを和らげるために、学校は何ができるだろうと考えたとき、まず大切なことは、子どもたちの多様性を容認し受け入れの柔軟な対応、子ども一人ひとりに向き合う制度の必要性が学校に求められていることだと思われる。そして、現場では、子どもの個々の問題に向き合う余裕、医師や看護師、療法士などとの情報の共有、情報共有の場の確保が求められているのではないか。このようなことを大切にして、わかりやすく楽しい授業を心がけ、休み時間や自立活動の時間にゲームなどで楽しむことによって子どもたちとコミュニケーションをとり、更に、パン職人やプロのギタリストを招いての「パン作り」や「音楽鑑賞会」のような、子どもたちがわくわくするような取り組みを行うことによって、病気や入院によるストレスが和らげられると思われる。

精神疾患や発達障害など、いろいろな病気によるストレスを抱えた子どもたちとその保護者がともに「院内の学校はとても楽しい。」「院内の学校へ来るとほっとする。」と言ってもらえる、子どもたちが「できること」や見つけた「成長」を共有できる学校をめざしたい。